

『アジア英雄伝』

坪内隆彦著

展転社(2008年刊)



などと積極的に日韓「合邦」運動を進めたが、元老・山縣有朋、寺内正毅陸相などの日韓「併合」派に敗れ、「其の統治に於て全然韓人の民情風俗を無視し、压迫睥睨唯だ其の主権を頑守するの外、何等の能事を示さざりしが如き、何れも皆な将来の禍根ならざるもの是れなりとす」(本書133ページ)という結果に失望し、44歳で神戸に客死した。

「あなたがたは、崇高な高みから帝国主義の野望にまで墮してしまわれたのです。あなたがたはその野心の実現に失敗し、アジア解体の張本人に成り果てるかもしれません」(本書151〜152ページ)というガンジーの本批判の言葉通り、日本政府の反植民地主義・興亜陣営への対応は帝国主義的といわれても文句の言えないものがあつたのは事実である。

本書に登場する25人のアジアの志士たちは多かれ少なかれ、日本政府や軍の「裏切り」にあっているのは本書を

たことに日本政府・政権要路者は無自覚で、在野民間の興亜陣営が主体となつてアジアの英雄たちに資金的、精神的、人材的支援を行い、日本政府はしばしばこれを妨害する挙に出たことは、本書でも繰り返し描かれている。

現在も韓国で「親日反民族行為者」の汚名を着せられている李容九(1868〜1912)は、樽井藤吉の『大東合邦論』の主張する、欧米のアジア侵略に対抗すべく日韓の対等合邦からアジア連邦、更には世界連邦へと発展する東洋平和のための興亜論に傾倒し、一進会を設立して武田範之、内田良平

19世紀から20世紀半ばにかけて、「興亜」の二文字に奮い立ち、植民地の解放を目指して苦闘を続けたアジアの英雄たちがいた。彼らのほとんどが、明治維新を成し遂げ、日清・日露の両戦役、そして第二次世界大戦・大東亜戦争を戦った日本の姿を見て、絶対的と思われた白人欧米列強支配に対して自分たちも立ち上がれば、打倒することが可能である、と確信と勇気を抱いたのがその闘争人生の原点であつた。

奇妙なことに、近代におけるわが国の奮起が植民地だつたアジア諸国の民族解放、独立運動に強烈な影響を与え

てはならない。ドイツの矛先を英仏へ、

日本の矛先を蒋介石の中国に向けさせよ。そして戦力の消耗したドイツと日本の前に、最終的にアメリカを参戦させて立ちはだからせよ。日独の敗北は必至である。そこで、ドイツと日本が荒らし回って荒廃した地域、つまり日独の砕氷船が割って歩いた後と、疲弊した日独両国をそっくり共産主義陣営にいたただくのだ。」

1935年、モスクワでのコミンテルン第7回大会でスターリンは帝国主義諸国間の戦争を激化させてその疲弊を誘うという上述の「砕氷船テーゼ」を唱えた。事実尾崎秀実やデクスター・ホワイトなどのコミンテルン・シンパはテーゼに忠実だったように見える。昭和20年2月14日に近衛文麿が行つた上奏にもこのあたりの経緯が述べられている。

…抑々満洲事変、支那事変を起し、之を拡大して遂に大東亜戦争にまで導き来たれるは是等軍部内の意識的

した。

・蒋介石はコミンテルンに操られて日本軍と国民党軍を戦わせて双方疲弊させられ、毛沢東共産軍の中国大陸支配に道を開いた。

・日米開戦にあたって、ハリー・デクスター・ホワイト財務次官などのコミンテルンスパイがハル・ノートを作成して日本が先に攻撃するよう仕向けた。

・大東亜戦争の結果アジア・アフリカ諸国が白人支配から解放された。もしあのとき日本が戦っていなければ現在のような人種平等な世界は百年、二百年遅れていたかもしれない。

・多くのアジア諸国は大東亜戦争を肯定的に評価している。これが田母神論文の骨子である。コミンテルンは、スターリンの「砕氷船テーゼ」に則っていたといわれている。

「ドイツと日本を暴走させよ。しかし、その矛先を祖国ロシアに向けさせ

読めば分かる。ただ興亜会、玄洋社、東亜同文会、黒龍会、猶存社などに連なる、頭山滿、内田良平、平岡浩太郎、宮崎滔天などの野武士、浪人群こそは興亜の理想を掲げ続け、そのために一身を擲つてアジアの英雄たちを支えたことも本書が余すことなく描ききつており、そこにこそ日本の真の理想が存在したことを志士たちは胸に刻んでいる。

*

田母神俊雄前航空幕僚長の論文「日本は侵略国家であつたか」が問題となり幕僚長辞任事件にまで発展したが、その内容には興亜をめぐる一種の論理破綻が読み取れる。

・戦前日本軍が中国大陆や朝鮮半島に駐留していたのは、相手国との条約に基づいた合法的なものであり、一方的な「侵略」ではなかつた。

・日米安保条約で日本に駐留する米軍も合法的で、侵略とは言わない。

・日本は満州、朝鮮半島、台湾に内地以上の社会資本投資を行い、優遇

計画なりしこと今や明瞭なりと存候。満洲事変当時、彼等が事変の目的は国内革新にありと公言せるは、有名な事実に御座候。支那事変当時も「事変永びくがよろしく事変解決せば国内革新が出来なくなる」と公言せしは此の一味の中心的人物に御座候。

是等軍部内一味の革新論の狙いは必ずしも共産革命に非ずとするも、これを取巻く一部新官僚及民間有志（之を右翼というも可、左翼というも可なり、所謂右翼は国体の衣を着けたる共産主義者なり）は意識的に共産革命にまで引きずらんとする意図を包蔵し居り、無智単純なる軍人々に踊らされたりと見て大過なしと存候。

此事は過去十年間軍部、官僚、右翼、左翼の多方面に亘り交友を有せし不肖が最近静かに反省して到達したる結論にして此結論の鏡にかけて過去十年間の動きを照らして見る時、

そこに思い当たる節々頗る多きを感じる次第に御座候。（中略）

昨今戦局の危急を告ぐると共に一億玉砕を叫ぶ声次第に勢を加えつつありと存候。かかる主張をなす者は所謂右翼者流なるも背後より之を煽動しつつあるは、之によりて国内を混乱に陥れ遂に革命の目的を達せんとする共産分子なりと睨み居り候。

近衛が感じたように、コミンテルンはさまざまな触手を使って満洲事変、支那事変を長引かせ、最終的に日米戦争に持っていく謀略を仕掛けたのは事実であろう。とすると、東亜の解放、欧米白人支配の打破、という大東亜戦争のスローガンは、謀られて突入してしまつた日米戦争の帰結として苦し紛れに捻り出したものといわざるを得ない。畏に嵌った者は愚かであり、それを東亜解放といつても短絡的強弁と見られるであろう。

大東亜戦争においても、このように

為政者は東亜民族の解放への希望、日本への期待に、鈍感、無自覚に戦争業務を遂行していたように思えてならない。結果としてわが国の戦いが、インドネシア、マレーシア、ビルマ、そしてインドなどの独立につながったが、日本だけが世界最後の植民地として主権在米60年を今日まで続けている。

明治維新も日露戦争も、それほどの衝撃を世界に与える意図も意識もなかったが、結果はコロンプス以来500年の世界白人支配構造を大きく変えた。わが国は無為の神はかりをなす不思議な役回りを持っているようだ。

為政者・政府の無自覚に対して、民間在野の興亜陣営の歴史観や使命感はアジアの志士たちの賞賛するところであり、わが国が草莽によつて支えられている国であることを示して余りある。「それは、白人の支配が東洋から消えるまでの間に過ぎず、そういう時代の招来のために、今まで自分が出ることをやって来た。東洋の人民を助け

るのが、日本の宿命である。その後、真のアジア民族の兄弟相和する時代が来て、文明に新しい何物かを示すこととなるのだ」（本書5ページ）、という頭山翁の言葉には、興亜思想が単にアジア民族独立の思想ではなく、西洋近代文明を超越する崇高な志向性を持つものであることが示されている。アジアの英雄たちのバックボーンには、必ず宗教的確信が潜んでいたことを本書は明らかにした。

フィリピン独立の先駆者アンドロス・ボニファシオはカトリック教徒だったが、スペイン支配以前のタガログ

人世界こそが「完全に満ち足りた、至福の状態」、つまり民族の樂園であり、そこに復古することが独立の最終目的と捉えていた。

康有為の大同思想、李容九の三教帰一、ガンジーの皇道経済とも言いうる「生命経済論」、クオン・デのカオダイ教による万教帰一、マヘンドラ・プラタップの慈悲教など、名称や形式は異なれども、その内容は驚くほどわが国の皇道思想による宇宙万有同根一体の原理に近似しており、ここに興亜思想が西洋近代を超越し得る契機が存在していることが分かる。

「文明とは道の普く行はるゝを賞賛せる言にして、宮室の莊嚴、衣服の美麗、外觀の浮華を言ふには非ず」（「西郷南洲遺訓」）。

明治10年の西南の役での西郷軍の敗北以降、興亜の論は草莽に沈潜しアジア諸民族の地下水脈に流れていった。西郷がやろうとした第二維新の中に、西洋文明の行き詰まりを克服し、アジア、いや世界の民に初源への復古維新をもたらす何物かがあったのではないか。本書は、アジアの英雄を通して日本の目覚めと真の独立を訴えた好著である。